

テーマ：2010年7-9月期GDP（1次速報）予測
 ～3%を上回る高成長だが、10-12月期には反動減が避けられない～

発表日：2010年10月29日（金）

第一生命経済研究所 経済調査部
 主任エコノミスト 新家 義貴
 TEL:03-5221-4528

○ 年率3%超の高成長も、持続性はない

2010年7-9月期の実質GDP成長率（11月15日公表予定）を前期比年率+3.6%（前期比+0.9%）の高成長と予測する。4-6月期の同+1.5%から伸びが明確に高まる見込みだ。

もっともこれは、個人消費がエコカー補助金終了やたばこ値上げを前にした駆け込み需要等の一時的要因によって大きく押し上げられていることの影響が大きく、持続性はない。輸出の減速が続くなか、個人消費で大幅な反動減が予想されることから、10-12月期は大幅なマイナス成長になる可能性が高いだろう。

○ 需要項目別の動向

7-9月期の成長を牽引するのは個人消費であり、前期比+1.2%の高い伸びが予想される。個人消費だけで7-9月期のGDPを前期比年率+2.8%ポイント押し上げる見込みであり、高成長のほとんどが説明可能である。エコカー補助金制度が終了する前の駆け込み需要によって自動車販売が増加したことや、10月からの値上げを前に、たばこの駆け込み需要が発生したことが消費を押し上げた影響が大きかった。なお、猛暑効果については、エアコンや飲食料品などが押し上げられた一方、あまりの暑さに外出機会が減少するといった面もあったが、トータルで見るとプラス効果がやや勝った模様である。

もっとも、これらの押し上げ要因はすべて一時的なものに過ぎない。既に9月の自動車販売は駆け込みの反動から急減しているほか、過去の例から見て、値上げ後のたばこ消費は急減が必至である。10-12月期の個人消費は大幅な減少が避けられないだろう。

設備投資は前期比+0.7%と小幅増加を予想する。これで4四半期連続の増加であり、企業収益の増加を背景に企業の設備投資意欲が徐々に持ち直している様子が窺える。もっとも、増加ペースは依然緩慢であり、景気の牽引役になるには力不足である。

輸出は前期比+2.7%が予想される。依然プラスを保っており、輸出が腰折れしているわけではないが、4-6月期の前期比+5.9%からは伸びが鈍化し、減速傾向が確認される見込みである。世界景気が減速傾向にあることや、リーマンショック以降の急激な落ち込みからの在庫復元効果が世界的に一巡していること等が、こうした輸出減速の背景にあるとみられる。また、IT関連財輸出の増勢が弱まっていることも輸出の頭を押さえている。一方、輸入は前期比+2.5%と緩やかな増加が続くと予想され、外需寄与度でみると前期比+0.1%ポイントになるとみられる。2010年1-3月期の前期比+0.6%ポイント、4-6月期の同+0.3%ポイントから押し上げ寄与が縮小し、外需の景気牽引力の弱まりが示されることになりそうだ。

その他、住宅投資は、各種政策効果や所得環境の緩やかな持ち直しを背景として前期比+1.2%が予想されるほか、公共投資は予算削減の影響から前期比▲0.9%と5四半期連続の減少が見込まれる。

2010年7-9月期GDP予測

	(%)
実質GDP	0.9
(前期比年率)	3.6
内需寄与度	0.8
(うち民需)	0.8
(うち公需)	▲0.0
外需寄与度	0.1
民間最終消費支出	1.2
民間住宅	1.2
民間企業設備	0.7
民間在庫品増加(寄与度)	0.0
政府最終消費支出	0.1
公的固定資本形成	▲0.9
財貨・サービスの輸出	2.7
財貨・サービスの輸入	2.5
名目GDP	0.5
(前期比年率)	2.1
GDPデフレーター(前年比)	▲1.8

※断りの無い場合、前期比(%)
 (出所)内閣府「国民経済計算」